「佐伯史談」二百号に寄せて
郷土の歴史に学ぶために

会長　真柴茂彦

県南の地に昭和二・三十年台に結成され営々と今日まで活動を続けている二つの大きな文化団体がある。佐伯史談会と佐伯合同短歌会である。ともに五十年ほどの歴史をもつことになるが、これらの会は突然に生まれたものではない。史談会の場合は「明治四十三年に佐藤蔵太郎（鶴谷）による豊後史談会のながれがあった」という清田義雄元副会長の言葉を、山本保先生が「発足三十年の歩み」に書いている。佐藤鶴谷は佐伯史など佐伯・海部の町村史をはじめ県内の歴史書を執筆している郷土史の先人である。佐伯合同短歌会では史談会とほぼ時を同じくして明治四十五年、後に武者小路実篤の「新しき村」に参加した加藤勘助などにより歌会が結成され活動が始まった。その後昭和初期の県下をリードする「南豊

佐伯史談200号編集委員会

歌人」へと続いていく。

二つの会は共に佐伯の文化を愛する伝統的な風土に生まれ冊子の発行、例会行事、研修会などを持ち現在に至っている。

「佐伯史談」は会員の研究発表の場として、また郷土史の一般への普及の場として昭和四十年より四十七年間今二号の二百号にいたるまで大きな役割を果たしてきた。

現在発行部数三六〇冊、その内約は三二〇名の会員と県内外の機関や同好の会への寄贈本であるが、市内の書店の店頭にも残存本は並べられている。

郷土の歴史については「佐伯史談」発行のほか現在講演会、会員研究発表会などを無料公開で毎年実施している。また、教育委員会でも中央公民館の歴史講座や歴史資料展示会などを開催してきた。しかし、佐伯の人々は郷土の歴史について意外と知らないという声がある。

考えてみると、郷土には毛利高標の佐伯文庫や四教堂などをはじめ私達が知って学ぶべき遺産が多くある。しかし、そのような遺産は多くの市民の目に触れる機会はこれまで、ほとんどなかった。数年前から、先人に学ぶべしと、その知と徳にあやかるべく四教堂塾なるものを開いて活動しているグループもある。

佐伯文庫について名前は知っていても、文庫本八万の内佐伯市に残存本すると言うおよそ三千冊の一部でも見た人はほとんどないと思う。いたとしても、ごく限られているのではないだろうか。確かに市内に残っていた佐伯文庫の多くは毛利氏の所有として池彦の倉庫に長い間保管され目にすることはできなかった。現在図書館の郷土資料室に保管されている。毛利氏からの旧藩時代の寄贈品も佐伯にきてから部分公開があったが閲覧した人は多くない。総じて佐伯の歴史や毛利藩の偉業を目にする機会がほとんどなかったことが、郷土のことをあまり知らないという声になったのではないだろうか。

これからは身近にある市民の財産が、われわれの知識や郷土の誇りとして共有されるために歴史資料館の一日も早い建設が望まれる。

しかし、まだ、その構想も建設の場所もはっきりしない。三余館の建設が計画されたとき、城山下の現在の駐車場に歴史資料館の構想図が佐伯勤労者総合福祉センター（三余館）と同時に出されたが、三余館ができるとその後この話は一度も出ることはなかった。

おそらく、歴史資料館、私は総合博物館が望ましいと考えるが完成まで数年はかかるだろう。現在の財政事情では場合によってはさらに遅れるかもしれない。

ならば、既存の施設の中に仮設の歴史資料館を設置し、希望のときに見ることのできるようにすることが必要ではないだろうか。

毛利氏をはじめ、佐伯市に貴重な資料を寄贈された中島（子玉）家など多くの遺族の気持ちを考えても、また、待ち望んでいる市民のためにもそれが望ましいと考える。

「私が生きている間には展示公開してもらえないだろう」と他の町に貴重な資料を寄贈した先人もいた。

その町では即刻既存の施設の一部を開放して展示館にして公開し、資料の修復や整理が進むたびに特別展や、展示品の差し替えを行っている。

しかし、仮設資料館もなく言うは安く、実際には大変であろう。ならば、とりあえず公開展示の回数を増やし常設展へつながる努力がほしい。私たちの声を大きくしていく中で郷土のことを学び、歴史資料館建設につなぎたい。

歳をとったせいか、我ながら気ぜわしくなっていけないこの頃である。

解体中の三の丸御殿（小野英治氏提供）